

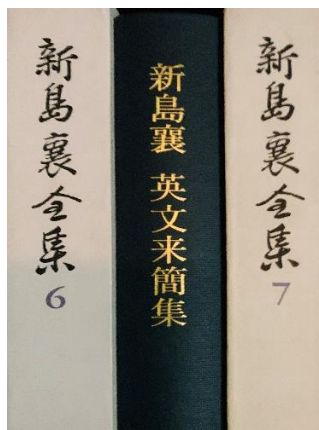


<同志社人が母校を誇りに思える情報>

「同志社ファン・レポート」(通巻 291 号)

『新島襄英文来簡集』について

田中智子氏 京都大学大学院教育学研究科准教授



「6 英文書簡編」と「7 英文資料編」の間に陣取ってご満悦！

— 今年の「読書の秋」におすすめ —

～同志社大学人文科学研究所編『新島襄英文来簡集』

English Letters to Joseph Hardy Neesima 1867-1891～

新島襄が世を去って、100 年が経ちました。このレポートをお読みの皆様は、彼の人物像を、何によって培ってこられたのでしょうか。信頼できる先輩や同志の話、あるいは関連本を通じてでしょうか。このファン・レポートをよすがとして、かもしれません。しかしもし、自分自身の目で直接、新島という人を捉えたいのなら、残された当時（リアルタイム）の記録に向き合わねばなりません。

かつて 1980 年代から 90 年代にかけて、同志社は、『新島襄全集』全 10 巻（計 11 冊）を

同朋舎出版から刊行しました。新島が書いた、あるいは受け取った種々の書類・メモや手紙・日記を網羅的に活字にして収めたもので、新島研究の基礎史料といえます。その事業の意義は、永く語り継がれるところでしょう。

ところがこの『全集』に収まらなかった一群の史料があります。「**新島襄が受け取った英語の手紙**」がそれです。この春（2020年3月）刊行された、同志社大学人文科学研究所編『**新島襄英文来簡集**』（木立の文庫）は、この500通ばかりの英文書簡を文字おこしし、収録したものです。ここに『全集』が本当の意味で完結したといえます。

7名の解説チーム（伊藤彌彦・北垣宗治・宮地ひとみ・本井康博・坂本清音・杉野徹・田中智子）の平均年齢はいささか高め。大半は、同志社大学・同志社女子大学をすでに退職された教授陣でした。月1回の研究会を6年続け、夏や冬の休暇期間には、暑さに負けず雪にもめげず、同志社の琵琶湖リトリートセンターで合宿し、種々の個性あふれる（癖）文字の解説に取り組んできました。現役大学院生（中国からの留学生）が研究会をサポートしてくれ、老若男女内外取り交ぜ、聖書や歴史・英文学の話はもとより、世間話にまで脱線しながら、和気あいあいと作業を進めてきたのもよい思い出です。

しかし英文書簡解説の道筋は、戦前から新島研究を手掛けていた森中章光氏によって、すでに付けられていました。この「森中稿本」をもとに、2001年度から2006年度にも研究会が組織され、解説成果を「未定稿」という形で公にしていました。長きにわたる先達の努力の積み重ねをもとに、「仕上げ」段階を担当し、刊行という最後の「おいしいところ」を味わえたのが、今回のチームということになります。

オリジナル史料は、『全集』収録分も含め、同志社社史資料センターのHPにある「新島遺品庫」にて画像で公開されていて、新島の筆跡や（絵や計算といった落書きも……）、当時の美しい便箋封筒などを、いつでもインターネット上で閲覧することができます。

ある人物の像を描くとき、その人物が言ったことや書いたことをもとにするのは、人物研究の基本です。しかしこの本が収めるのは、新島が書いたものではなく、新島に宛てられた手紙の数々です。周囲の人間が浮かび上がらせる新島像、ということになります。宣教師やアメリカの大学人たち、そしておもしろいことに、内村鑑三・下村孝太郎といった青年たちの書簡がみられます。日本人同士なのに、英語を用いてこそ伝わることもあったということなのでしょう。どこに学ぶべきか、同志社を、日本のキリスト教をどうするか、といった問いに向き合う彼らの姿に、胸が熱くなります。

また、留学中の新島が世話になったアメリカ人女性の書簡も多く含まれていることが特徴です。福沢諭吉同様、姉が多くて、年上の女性とのやりとりで慣れていた新島ならではの、ともいえるでしょう。しかし、アメリカ女性史研究者の小檜山ルイ氏（東京女子大学）は、そのような新島襄個人の資質であったり、時に「人たらし」と評される魅力であったり、で

はなくて、新島がいかに当時のアメリカのキリスト教文化・女性文化に適合する存在だったか、という点から、女性たちの協力や愛情を説明され、刺激的です。詳しくは、『週刊読書人』2020年6月5日号（に本書は取り上げていただきました！）に掲載された、小檜山氏の書評をご参照ください。「新島をとり巻く社会から新島を説明する」「新島を通じて社会を説明する」ことのおもしろさ、新島は、「新島研究」「同志社研究」のためだけに存在するのではなく、新島を通じて広く19世紀史がみえてくるのだ、ということがわかります。

さて本書は、英語はちょっと……という方にも楽しんでいただける構成となっています。注はすべて日本語で記したほか、和文の特別コーナーが設けられています。2015年の秋、英文解説チームのメンバー有志が、ボストン・アーモスト界隈の新島ゆかりの地にて、巡見をおこないました。メンバーが知り合いの同志社大学・同志社女子大学の卒業生にも同行を呼びかけたところ、総勢30人ほどのにぎやかな一行となりました。一週間ほどの旅の途次、ずっと案内人を務められたのが、80代半ばにして意気軒高、英文学者・北垣宗治氏でした。町やキャンパスを歩きながら、あるいは移動するバスの中でのレクチャーを、本書は語り口もそのままに収録しています。かつて出版された小冊子、井上勝也・北垣宗治編『ニュー・イングランドにおける新島襄ゆかりの場所』（学校法人同志社、2005年）の改訂・補足版のような位置づけのガイドです。お話は新島だけにとどまらず、英文学やアメリカ史など、多岐にわたり、縦横無尽の「北垣節」をお楽しみいただけます（分量の都合から、泣く泣くカットさせていただいた部分も多いのです）。このコロナ騒動が落ち着いたら、是非、本書を片手に（するには目方重めですが……）、現地を訪ねていただければと思っています。2015年当時の写真も、本書のあちこちにちりばめられています。

最後に、本書は、居間や寝室に飾っていただくにもふさわしい、豪華な箱入り上製本となっています。表紙や見返しには、有名なW.S.クラークから新島に宛てられた書簡封筒もあしらってあります。ちょっとお値段は張りますが、内容もつくりも、価格に決して見劣りしません。「同志社ファン」の皆様には是非、座右に備えていただきたい逸品です。お世話になった、同志社ゆかりのあの方に……。お中元の季節は過ぎてしまいましたが、お歳暮や引き出物などにも是非どうぞ。全国の書店やインターネット通販で、あるいは出版元の（株）木立の文庫のHP（<https://kodachino.co.jp/>）からもご注文いただけます。

外出ままならない秋の夜長、学生時分に戻り英語の辞書片手に、新島に向けられた友愛のことばをひもといて、ご自身の新島像を組み立ててみてくださいませ。■

（田中智子先生は2013年4月～2016年9月まで本書の研究代表者でありました。）

「**編者付記**」本書についての「**解題**」と「**書評**」をご紹介します。

*「**解題**」は、本井康博先生が『新島研究』第111号（2020.2発行）に掲載されています。やや専門的ですが、18頁にわたって体系的、かつ精緻に書かれています。

*「**書評**」は、既に文中で紹介された東京女子大学の小檜山ルイ教授が本書について「新島襄の欧米の人々との親交や折衝の様子が詳細に見えてくる」、「本書とその土台となっ

たこれまでの同志社の努力が他大学の大きな刺激となることを願ってやまない」と。

同志社関係者は、歴史的資料を整え、後世の研究に役立つように常に力を注いでおられます。この書籍が卒業生として、誇りにしていただいて間違いないでしょう。多田直彦記